

ヘッセのガイエンホーフエン時代

—文学活動と家庭生活の狭間で—

鈴木 直 行

1

高橋健二は『ヘッセ研究』の中で、ヘッセのボーデン湖畔ガイエンホーフエン時代即ち1904年から1912年の8年間を「3人の子を続けて設けたのであるから、夫婦生活のすべり出しは順調であったのだろうが、この結婚はすこぶる非実際的であった。結婚の時、27歳のヘッセに対し、マリアは36歳で九つも年上であった。36歳というのは、ヘッセの母マリーがヘッセを産んだ年である。その上、体格も気質も、そして音楽的な点もヘッセの母によく似ていた。名まえも同じである。この結婚はたぶん母への思慕が織りこまれているようである。あれほど慕っていた母は2年前（注：1902年4月24日）に死んだ。母のふところに帰るといふ気持ちがあったであらうか」¹と述べている。このことはヘッセ愛好家にとってほとんど共通認識のようになっていた。27歳と36歳という年令的にみて一般的通念に相応しくないという点を除けば、他のことは肯定的にとっている。体格、気質、音楽的な点は似ており、名前は同じであったというのである。そこから「母のふところへ帰る」という結論が引き出されるのであろう。それとは内容を異にするものがないわけではない。2人の関係を、そのように肯定的にはとらないものもある。例えばジョセフ・ミレックはそのヘッセ伝で次のように述べている。「ヘッセはマリーア・ベルヌリ以上に不適当なパートナーを選ぶことは出来なかったのだろう。彼女は彼より9歳年上であるばかりでなく、彼と同様我が強く自分のなかに閉じこもり、自分の見解に執着する女性であった。お互いに合わなかった。彼は彼女に対してあまりにも気性が激しく、また彼女は彼に対してあまりにも静かで控えめであった。彼は彼女の人に依存し

ないところを悪くとった。彼女は彼の気紛なところを悪くとった。あまりにも意固地だった。彼は気難しすぎた。彼女は彼の仕事にほとんど興味を示さなかった。彼は家政を理解しなかった。ふたりは相手の要求を認めないようだった。注意が欠けていることに対して神経が過敏すぎた。疎外状態が必ず起こった。次第に自分勝手な道を行きはじめていた。マリーアはますます家政や子供や音楽に没頭した。ヘッセは書くことや庭いじりに夢中になり、大きな交友範囲を大事にし、増大する不安に対し安全弁として旅を見出していた。²これを読めば、どうしてふたりは結婚などしたのかと不審に思うだろう。高橋とミレックの表現でたいへん大きな相違を見せているのは、ヘッセとマリーアの関係である。高橋は母への思慕から彼女と結婚したと解釈しているのに対して、ミレックの場合はこれ以上に不適当な相手を選ぶことが出来なかったのに結婚したと言って性質の違いを列挙しているのである。どうしてふたりが結婚するようになったのかという問題は、高橋の説に従うほうが簡単であるだろう。ところがミレックの説に従えば事はそう簡単にいかなくなる。しかし私にはミレック風の考えにしたがって見ていかなければ、ヘッセの新婚時代、つまりガイエンホーフェン時代は説明できないように思われるのである。非常に単純なことであるが、残された写真から次のような違いを感じる。彼の母マリーはたいへん深い精神性を持っているように見える。その精神は意固地にならないで広く開かれた性質を併せ備えているように見える。それに対して妻マリーアは、沈黙して自分の中に閉じこもり、時に意固地になりかねない性質を持っている感じがするのである。その大きな相違は、前者が心の内奥を開いているのに対して、後者はそれを閉じている。或いはすぐに閉じようとしていると思われるのである。また内に秘めた知的なものの点でふたりは違いすぎる。知的に比較し合うことなど意味がないとさえ思われるほどである。写真も生きた瞬間を留めているものであるから、やはり何らかの参考にはなるだろう³。作品では短編『あやめ』がマリーアの一面を表しているという。一読してまず感じられることは、主人公イリスが非常に物静かで感受性は繊細で気難しい女性として描かれていることである。作品はアンゼラムという男性の視点から書かれている。題名にはアンゼラムが関わりを持

つ女性イリス（あやめ）がとられている。アンゼラムは、幼年時代、母が丹精込めて作っていたあやめが特に好きだった。花のなかを覗き込み、その中に自分が入っていくような思いを抱く。そのように神秘的な心から馴染んだ関係には、それを失ってしまった時になってもまたその関係を結びたくなるというのだろう。このようなことから母とマリーアの間には神秘的なつながりがあり、マリーアへの結びつきは、母マリーへの思慕の表れであるという考えも出てくる。ところがイリスの具体的な描写は、母とは全く異なったことばかりである。イリスは人との交際がうまく出来なかった⁴。母マリーは大変開かれた人間であった。この作品から母マリーとマリーアとの神秘的な関係が導き出せるとするなら、それはヘッセの見事な創作力によるものである。

2

1904年8月2日、ヘッセはマリーア・ベルヌリとバーゼルで結婚するとすぐにガイエンホーフェンに移った。結婚に至る経緯には、年令の差ばかりでなく何か特別なわだかまりが存在していたように思われる。結婚する直前、ヘッセ自身は郷里のカルプに戻り作品執筆に没頭しているが、マリーアはボーデン湖畔などに住まいを探している。

ヘッセは彼女と結婚する前ふたりの女性に恋をした。ひとりにはチュービンゲン時代になるが、ユーリエ・ヘルマンであり、今ひとりはエリーザベト・ラ・ロッシュである。ユーリエ・ヘルマンに対しては、1899年8月26日、カルプから出された手紙が残っている⁵。それは若者特有の美しい少女に思い焦がれた、多分にひとりよがりの愛の吐露である。愛の気持ちを交わし、なんとか一緒にになりたいというようなものではない。ユーリエの美しさに触れ、ヘッセの中の美意識が高鳴る。それを表さずにはいられないのである。その気持ちを受け取ってくればそれでよいのである。ラブレターでありながらそれ以上のことを思っていないのである。しかもこの手紙は、チュービンゲンをすっかり引き払ったのちバーゼルに移るまで、しばらく郷里のカルプにいた時書かれたものである。ユーリエの美しさにすっかり感動したという気持ちを彼女に表さないではいられなかったのである。それを書き終え投函してしまった時に

は、もう終わったという感情が働いていたように思われる。彼の心はすでにバーゼルに飛んでいるのだろう。

ヘッセは実に多くの手紙をすでに少年時代から書いているので、数巻の書簡集で生活の一端を確認できるようになった。それと合わせてその時代に成立した著作、あるいはその時代を描いているものを確認していけば、ヘッセの人生をかなりたどることが出来るようになった。ただし作品と現実とがどのような関係にあるかはそう単純な図式で表すことは出来ない。「ヘッセの文学は、あらゆるドキュメンタリー的特色にもかかわらず、彼が実際には果たすことの出来なかった生を埋め合わせするものである。」⁶そのため事実と事実との間を埋めるには、仮説的類推も必要だと考えられるのである。

もうひとりの女性エリーザベトに思いを寄せるのはバーゼル時代である。バーゼル時代はヘッセ22歳の秋1899年9月15日に始まる。ヘッセはバーゼルの移ると、両親の知人宅を頻繁に訪問している。チュービンゲンではバーゼルに比べ知り合いが少なかったことも関係するが、あまり人との交際はなかった。それまでのヘッセからは考えられないほどである。そこでは家庭音楽会や朗読会などがごく普通に開かれていた。音楽は彼にとって一番の慰めであったのだろう。両親をはじめ肉親や親しい知人に宛てた数多くの手紙では、その様子が度々語られている。エリーザベトを初めて目にしたのもそのような音楽会の時だった。その時の様子は、1900年2月1日両親宛の手紙に書かれている。「ラ・ロッシュ家の夕べ(12時まで)は大変感じがよく打ち解けていました。ベルヌリ博士がエリーザベト・ラ・ロッシュとクロイツェルソナタの第1楽章を實に見事に演奏しました。」⁷またエリザベトの回想には次のような記述がある。「あの頃、今日ではもはや存在しないような快く客をもてなす家庭がバーゼルにはありました。もっと厳密に言いますと、公文書保管人のルードルフ・ヴァッカーナーゲル博士のお宅でした。(略)夏、ヴァッカーナーゲルの人々は、リーエン近傍の小さなヴェンケンホーフで過ごしていました。人々は、気持ち良い土曜日の夕方、かなり大勢連れ立ってしばしばそこへ出かけました。私がヘルマン・ヘッセに再び出会ったのはその頃だったのです。彼のことは、ヴァッカーナーゲル家ですでに大変話題

になっていました。その若い詩人は、そのような人の集まりの中で大変気持ちよく受け入れられているようでした。ヴァッカーナーゲル一族の方々もみんな彼には非常に好意を抱いていました。しかし私はあの頃まだずっとガルドーネ（注：イタリアのガルダ湖畔にある土地）の事で夢中になっていました。バーゼルの知り合いにはあまり関心がありませんでした。⁹ エリーザベトとヘッセの両親は知り合いであった。ヘッセ一家は父の仕事の関係でバーゼルにいたことがあった。ふたりは成人して再会したことになるのである。『ヘルマン・ラウシャー』の日記の章には、度々エリーザベトに関する記述が出てくる。まるで溜息のような記述ばかりである⁹。『ペーター・カーメンチント』になると、その描写は詩文として実を結んでいる¹⁰。エリーザベトを見た瞬間からヘッセは彼女に恋い焦がれていたのである。しかし気持ちを即座にあるいはありのままに表すことは出来なかった。それまでの孤独で内向的な生活に由来すると考えられる。また自分は一介の書店員にすぎず、詩人として少しばかり知られているとはいえ、あまりにもおぼつかない状態だった。眠れない夜彼女を思い、時には詩作し、日々を重ねるばかりだった。ふたりは一緒にいることが出来ない運命だった。それはヘッセにとって自分の存在を揺るがすような事件であったが、傍から見たところはっきりとは分からないままだった。

3

マリーア・ベルヌリと知り合う切っ掛けになったのもそのような知人宅訪問の場合だろうと考えられる。書簡集で初めてマリーアの名前が出てくるのは、1903年4月8日、フローレンスからカルプの家の人に宛てた手紙である。友だちになった女流画家がバーゼルを引き払ってイタリアに移住することになり、マリーア・ベルヌリとヘッセが同伴してイタリアに赴いた様子が記されている。彼女はバーゼルで妹と写真館を経営していた。そこでも芸術家の集まりがしばしば持たれたのである¹¹。マリーアはピアノをうまく演奏する女性だった。彼らふたりが知り合うきっかけはたぶん音楽会であったのだろう。彼らが共有できるものは音楽だけだったのかもしれない。しかしヘッセにとってそれだけで一

緒になろうという気にはならなかったと考えられる。それまでのヘッセの境遇からくる感情が強く働いていたのではないかと推測されるのである。

1903年6月と推測されている父ヨハンネス・ヘッセに宛てた手紙によると、すでに結婚を考えている。「最近私は結婚の可能性を考えてみるという奇妙な状態にあります。すでにかなり長いこと友だちづきあいをしている女性があります。彼女は私を愛しています。私よりずっと年上ですが、私には相応しい女性だと思います。でもこのことには今のところお金が問題で、私はあまりにも貧しいです。しかも結婚には漠然とした恐れを抱いていますので、さしあたって決心することは出来ません。はっきりしない時を当てにして婚約するのは良いことだとは思いません。未決定のままになっていることですから、お父さんにも何も言わなかったのです。当然のことですがお父さんに宛てた全く個人的な報せとして受け取って下さい。他の人にはお話ししないようにしてください。私はかなり長く待たなければならぬでしょう。またその女性は決して若くはありませんから、延ばしたりすれば結局何もならないのではないかと恐れています。いずれにしてもお父さんには心配をかけたくありません。」¹²結婚を考えているが経済的な裏付けがまだあまりないので決心がつかないというのである。何が何でもその人と結婚したいというような、そんな感情のたかぶった状況ではない。しかしそのまま経過してはよくないので出来れば早く決心していかなければならないと感じている。ヘッセ自身に家庭という小さな社会で保護された生活を願う気持ちが強く働いているように思われるのである。「すでに長いこと」と言っているが、マリーアを意識的に見るようになり、人生の伴侶として考え始めるのは、父宛の手紙から1年ぐらい遡ると考えられる。母の死後、孤独を最も感じている数ヶ月間に当たるだろう。

同年6月21日、バーゼルからチェスコ・コモ宛の手紙では次のように語られている。「彼女は可愛らしい愚かなグレートヒェンではありません。教養、人生経験、知性の点で少なくとも私と同等の女性です。私よりも年上です。あらゆる点で自立的な優れた人格の方です。彼女は私をずっと前から愛しています。私達はよい仲間でした。やっと2、3週間

前、友達同志から愛人同志になりました。そしてこの頃その貴重な優れた方は、私に心を傾け私の愛情を受けて一層成熟しています。その一方このあくせくした日々、私自身を喜びにつけ苦しみにつけ人生の高みに引き上げ、どんな人生も一層親密に力強く感じさせてくれます。」¹³マリーアはヘッセが彼女を意識する前から彼を憎からず思っていたのである。父宛の手紙では、はっきり意志表明をしてはいないけれども、すでに結婚する気持ちが固まっている。単なる友達から愛する者同志になったということを第三者に何気なく語っているのは、その気持ちの現れと取ることが出来る。彼はすでに文学活動もかなりしており、地方的ではあるが有名になってきていた。また『ペーター・カーメンチント』には期待を持っており、結末の部分などは自分でもよく書けていると考えている¹⁴。

ふたりの間の感情的なやり取りを考えてみると、先ほども書いたように恋の感情にさいなまれて無性に一緒にになりたいとか、この人しかいないといった様子は全くない。また彼女には、写真で見るかぎり近寄りがないという雰囲気や人を魅了する美しさは全く存在しない。ごく普通の女性である。

4

チュービンゲン時代も彼は非常に孤独な生活を送っていた。チュービンゲン大学の学生数人のサークルに加わり、彼らとの交流は確かにあったが、それも時々であって大方の時間は書店員見習いとして過ごさなければならなかった。1日12時間ほどの時間が仕事のために費やされた。真夜中には読書に耽った。そのような生活状況は、彼の中に二つの気持ちを形成するのに大変与ったと考えられる。すでに少年の頃から詩人になりたいと思っていたが、ひとつはもちろん文学世界への憧れである。いまひとつは市民世界への憧れである。文学世界への憧れが少年時代の13歳の頃に急速に芽生えたように、同じ頃市民世界への憧れも同じほどの強さで生じたと考えられる。作品『車輪の下』には手堅い市民社会へ憧れている様子がうかがわれる。彼は修道院付属学校を退学してから何をやってもうまくいかず、苛立ちと孤独に苛まれる日々であった。手仕

事や規則的なサイクルを持った仕事をし読書に耽ることによって不安定な苛立ちの日々はなくなっていったものの、強い孤独感から脱することは出来なかった。人との交流には実に不器用になっていたのも、人との結びつきの中で情感豊かに暮らしていくことが憧れでもあった。先にも述べたようにヘッセは、バーゼルに移るとすぐチュービンゲン時代までの孤独な状態から脱するように父母の知人宅を度々訪問している。そしてその様子を手紙にしたため両親に宛てて報告している。市民生活の雰囲気をおおいに吸収しているようである。

作品『ペーター・カーメンチント』には、文学世界への憧れと市民社会への憧れという両極的傾向が現れている。両極的感情はまだ強く対立し合う関係にはなっていない。ペーターは、エリーザベトへの思慕を抱きつつ自分の存在が何の違和感もなく溶け込むことの出来る小さな村ニミコンで、一見穏やかに暮らしていくのである。しかし作品の結末部分は現実のヘッセの場合とは大きくかけ離れており、観念的な所産である。彼の憧れの念を具象化したものと言ってよいだろう。心の内は穏やかどころか、エリーザベトへの思慕の念が疼いていたことだろう。

バーゼル転居とマリーアとの結婚の間には、エリーザベトへの恋と失恋、母の死という大事件が起こっている。ヘルマン・ヘッセにとってエリーザベト・ラ・ロッシュへの思慕は、彼の文学的世界を形成する重要な原動力になっている。その恋は彼女を初めて見かけた1900年1月31日から始まる。その様子は、2月1日の両親宛手紙に書かれている。そして失恋するのは1902年4月頃ではないかと推測される。1902年4月30日、バーゼルからカルプの家の人たちに宛てた手紙は実に奇妙なものである。「お母さんのお葬式に行けなかったことは悲しいことですが、私にとってもあなた方にとっても、私が行った場合よりひょっとしたらずっと良かったことでしょう。私は今だに大変打ちのめされています。それにもかかわらず24日以前の数週間より後の日々の方が苦しくはないのです。もちろん訃報を受けとってからすっかり感覚を失ってしまい疲れはててしまいましたので、もう少々の痛みは感じないほどでした。そのうえ最後の頃にはお母さんのためにかえって救済があればと望んでいたほどでしたから、本当に悲しくはありましたが、至福の穏やかな天国への

旅立ちにむしろほっとすることが出来たほどです。それ以来お母さんを失ったというより心の中におられるという感じに慰められるような気持ちを抱いています。

あなた方、特にお父さんには誠実な愛と同情の念を抱いて挨拶を送ります。これからそちらの生活はどのようなになっていくのだろうかと思っています。簡単でもかまいませんからそちらの様子を時々私に知らせてください。お母さんからのうれしい生き生きした手紙や慣れ親しんだ素晴らしい筆跡を、もう4週間も前から受け取ることなく過ぎなければなりませんでした。私は、24日の夜、お母さんからいただいた手紙を見ながら過ごしました。それには、私の方ではその真価がたいい分かりませんでした。実は知恵や善意や没我的な愛がふんだんに語られていたのです。」¹⁵

パーゼル時代はもちろんのことチュービンゲン時代にも、ヘッセは、実際は人との交流を出来るかぎり持っていた。しかし総じて非常に孤独な日々だった。修道院付属学校を退学して以来ひどくすさんだ日々を過ごした少年時代はすでに全く過去のこととなり、地道な社会人ヘッセが成長していた。このように奇妙な雰囲気の手紙をこの後にも先にも見出すことが出来ない。ヘッセは母の訃報を受ける直前、彼の存在を揺り動かすような体験をしているのではないだろうか。自分自身の存在の否定すら考えるような体験である。そこへ母の訃報が届いたのである。自分と最も関わりのある者の死は、逆に生に留まらせる働きがあったのではないだろうか。自分の存在に疑問を抱いているとき、人間の死が別の人間を生に踏み留まらせ、生を全うする原動力のようなものを起こすということは十分にありうることである。それゆえ母の訃報が入る前の体験は、ひとり秘かに恋していたエリーザベトへのかなわぬ恋しか考えられないのである。同じ図式を『ペーター・カーメント』の中に見ることが出来る。恋人を失い友人を失ったペーターが、パリの森でひとり自分の人生を考え死を思う箇所がある。その時突然母の死の様子が思い出されるのである。「死は、きびしく見えはしたが迷った子を家へ連れもどす慎重な父親のように、力強く、またやさしくもあった。」¹⁶（高橋健二訳）ペーターはその後自殺のことなど考えなかった。しかし24歳のヘッ

セは、エリーザベトに対する失恋と母を失うという大きな出来事によって決定的な打撃を受けていく。つまり極限的な孤独感に陥るのである。

ここでエリーザベトと母がヘッセの精神世界にどのように関わっているか、その概略をまとめておく。彼の内面世界を深めるのに先導する意味をなしたのはエリーザベトである。その内面世界を支配しているのは母親のマリーである。ヘッセは後に人間の心的現象を具象化した『デミアン』¹⁷を書いたが、シンクレアの心の世界の案内人ベアトリーチェとその世界の中心人物エヴァ夫人は、エリーザベトとヘッセの母マリーがヘッセの観念的世界で夢幻的に展開した姿と取ることが出来るだろう。図式的に言えば、エリーザベトは彼の精神世界を深め、その世界の内奥には母マリーが支配しているということになる。ヘッセは自分の精神世界にダンテの『神曲』と同じような構造を見ているのではないかと考えられる。

1902年5月7日バーゼルから出されたチェスコ・コモへの手紙には、次のような記述が見られる。「私がこのところ普通の手紙を書くことが出来ないことはお分りでしょう。でもあなたのお手紙に対して少なくとも一言お礼を申し上げないわけにはいきません。あなたは私のために本当にやさしい親切な言葉をかけてくださいます。きっと善良で親切な人に違いありません。私を喜ばせてくれました。心から私の友人であることを感じました。ありがとうございます。今の状態はよくありません。習慣や臆病からですが誰にも自分の悩みを打ち明けません。毎日見かける知人の多くは私の損失について全く何も知りません。それで毎日苦痛に満ちた仮面を付けて生活し、普段と全く変わらず人々と語らいます。そんな場合、眠られない夜には突然苦痛に打ち負かされたりすることがあります。」¹⁸ヘッセは、大きな打撃を受けた後で、自分を支えていることが出来ないほどの状況にあった。しかし母の死は彼を我に帰らせる働きをした。下宿先の部屋でひとりじっと運命のなすがままになっていたのである。母の死は、すっかり力を失っていたヘッセにかえって支えとなる意味をなした。彼を引きとどめ生へと立ち返らせる働きがあったのである。しかし生に留まったとはいえ世の中で人間に関わりを持っていくことが出来ないのである。失恋は人を孤独の中に突き落とし、人との関

わりを全面的に否定するような結果を招く。母の死は、ヘッセの場合、生に留まらせる作用をしたけれども、極限的な孤独感を脱することにはならなかった。孤独感をいっそう感じるばかりである。

5

1902年の後半、すなわち失恋と母を失うというふたつの事件の後、ヘッセは次第に人をあからさまに避けるようになっていく。都会に比べて自然の風物が好きだと述べながら人間社会から離れていこうとしている。バーゼルに移り人に交わろうとしていた様子からは想像できないほどの変わりようである。ところがそのような反社会的言動に比例して、マリーアへの接近が徐々になされている様子が散見される。孤独を求める心と孤独を脱したい心は共存する。そして反社会的な者同志が引き付け合っているのだろうか。1903年2月5日にはシュテファン・ツヴァイクに次のように告げている。「私のことはあまり話すことはありません。ちょっと異性に引き付けられたことがあったこと以外、私の気持ちは人間ではなく自然や本に向かっています。イタリアの古い短篇小説作家やドイツロマン派の作家たちが好きです。イタリアの町はもっと好きです。それらすべてより、山、川、溪谷、海、空や雲、花、木々や動物が好きです。旅をすることボートを漕ぐこと泳ぐこと釣りをすることなど何よりも好きです。」¹⁹ 社交的世界を完全に避けるようになっているのである。孤独感は頂点に達していたことだろう。母に代わる女性はもちろん存在しない。エリーザベトと同等の意味をなす女性も現れてはいない。1903年3月20日アルフォンス・バケに宛てた手紙は、そのような状況下で書かれたものである。「休みの時には戸外や飲み屋をうろつき回り、あるいはすでに1年以上見込みもなくあれこれ書いていますが、訂正や削除や変形でしか成り立っていない小説を執筆中です。私の努力全体の目標は、文学界や社交界から消えて、静かな放浪者とか享樂家としてひとり陽気に素晴らしい土地でぶらぶらしていただける程のお金を得ることです。」²⁰ この小説はもちろん『ペーター・カーメンチント』である。孤独を最も感じている時に、彼はこの作品を書いていることになる。『ペーター・カーメンチント』に、体験に基づいた希望を盛り込んでいるのであ

る。それは主人公の未来を表している結末部分である。ヘッセは孤独を求めながら連帯的存在を希求するような心的状態であったのである。孤独を求めながらも孤独から脱したかったのだ。そのため作品の中では、孤独に徹して文学を完成するという生き方を選択することは出来なかったのである。主人公ペーターを小さな協同体に溶け込ませることで自分の気持ちが落ち着くのを覚えたにちがいないのである。家庭を持ちそのような協同体に溶け込むことが出来ればという願望が非常に強かったのである。そのため社会の一員として人と交わり違和感なく生活していくことが作品の中で見事に書かれたのだろう。そのような時父にも知らせていたが、ひとりの女性がすでに現れていた。マリーアは決して自分の母に似てはいなかったけれども、物静かな落ち着いた音楽の好きな女性だった。しかも年上の家庭的な女性だった。もちろん心から慕っていたエリーザベトに代わるような女性ではない。逆に気安さがあったものと思われる。孤独を癒し静かな落ち着いた家庭を築いていくことが出来るかもしれないと思ったのである。自分のことを考えてみると、普通の軌道からはずれてしまった者のような感じがした。すでに知り合いのひとりとなっていたマリーアは彼を秘かに思っていた。それをヘッセ自身も意識するようになる。そして9歳年上にもかかわらず自分にふさわしい女性であると感じるようになる。またそう感じるように自分の方から努力しているきらいもある。ヘッセは彼女を「しっかり者」と度々表現している。いずれにしても家庭的な女性あるいは落ち着いた家庭を作りだすにちがいない「しっかり者」と映ったのである。そのような想念がマリーアを妻とするようになるのだろう。

6

ガイエンホーフエンでは古い農家を快適に住むことの出来る住まいにするため、ふたりはそれぞれ仕事を分担し、あるいは協力し合っていたようである。ところが家具なども一通り整いある程度の快適さが得られるようになると、めいめい自分の関心にそった生活をしていくようになる。ヘッセは創作や文学批評に没頭し、マリーアは家政や写真や音楽のことで時間を費やしていく。

ガイエンホーフエンからの最初の手紙は、オーストリア新ロマン派の作家フランツ・カール・ギンツカイに宛てた1904年8月12日の手紙である。出版された著書をお互いに評し合っている間柄である。「お手紙並びに私の著書に対する希望を抱かせてくれる書評ありがとうございます。緊張しました。私は、妻の言葉をかなり居心地の悪い状態で人に書き取ってもらっています。といいますのは家具がまだ到着していないのです。それで数日前からテーブルも椅子もないままがらんとした農家で暮らしています。ところで肝心なことに入りましょう。あなたとは個人的に、また『新自由新聞』ともつながりが出来るのはうれしいことです。目下手元には何もありません。数週間前から荷造りされ解かれないうままになっている書類の見通しさえ立たないのです。たいてい幾分大雑把になっている私の小説が、あなたには退屈すぎはしないか気懸かりです。」²¹

実際はガイエンホーフエンに移って最初の手紙から、ヘッセの不満な気持ちがすでにうかがわれる。マリーアからは生活する条件が整うようにいろいろと注文があったものと思われる。ヘッセの方は『ペーター・カーメント』の成功により文学活動にすっかり気持ちが傾き、家の整理整頓には極めて消極的な態度がうかがわれる。マリーアが苦心して探し出したガイエンホーフエンの住まいは、非常に単純な作りの古い大きな農家だった。空いている半分に自分たちが住み半分にはまだ家畜が飼われていた。快適に住めるようになるにはいろいろと苦労しなければならなかった²²。しかし手紙の中で住まいのことはあまり語られてはいない。文学活動に関する事ばかりである。文学活動に専念しようとする様子がうかがわれる。妻マリーアの事は稀にしか出てこない。ところが出てきた時にはほとんど憂鬱さがただよっている。同年10月25日女友達ヘレーネ・フォクト＝ディーデリヒスに宛てた手紙では「あなたは、私たちの生活に関してうまくいっているだろうと想像しておられますが、残念ながら当たってはいません。確かに家や村や周辺は素晴らしく感じよく快適ですが、こちらに引っ越してすぐ妻が病気になる、数週間前から治療のためバーゼルに戻っています。時々見舞っています」²³と述べている。妻の病気のことで、自分が考えていたのとは異なった展開をしている状況のこと、自分が旅の途中で病気になったこと、元気に帰宅し

たが不満や孤独や憂鬱で毎日が耐えがたいことなどが、すでに最初から、言葉数はわずかであるが気持ちを押さえているうちにふと洩れた言葉のように所々に表れている²⁴。

ヘッセはボーデン湖畔で非常に沢山の著作を著した。彼の生涯のうちで多作な時代であった。幾つかの新聞には文学評論や書評も常時投稿していた²⁵。ヘッセが家政に消極的で、しかもマリーアからはそれに対して要求があったにちがいない生活は、例の手紙でいきなり垣間見ることが出来るのである。それでも最初のうちすばらしい自然環境に恵まれた住まいでの生活は、世間を気にする必要もなく、表面はかなり気楽な感じだった。不便な住まいでも時間と共にある程度物も整い、落ち着きを得ることが出来るようになっていく。静かに生活できるようになっていくと決まって気になり始めるのは、ふたりが繋がり合っている精神的基盤であった。ガイエンホーフェン時代ヘッセとマリーアが共に写っている写真は、写真集で見るとかぎり1枚だけである。マリーアだけのものも非常に少ない。その数少ないもののほとんど全てが、見れば見るほど疎外感や不満や憂鬱が漂っているように見えるものばかりである²⁶。ヘッセは、一方で文学世界に没入しながら、また一方でよく守られた知的雰囲気「家庭」に住みかかったのである。それはヘッセの中に潜んでいる最も強い願望であった。マリーアに恋い焦がれることはなかったけれども、心からマリーアと家庭を築くことに憧れたのである。

ヘッセの考えた家庭は、ヘッセ自身が体験したような家庭であった。作品にはどこか問題のある家庭をしばしば描いている。例えば『車輪の下』では母親がいない。すでに亡くなっている。父親はごく普通の人間である²⁷。子供にとっても家庭にとっても不可欠なものは、母親の直接的な愛情である。それが欠けている。また知的に成長し始めた子供には知的雰囲気も必要である。ところがハンスの父親は金銭のことにやかましいばかりで、知的素養などまるで持っていない。子供にとって、母親の直接的な愛情と父親の知的な愛情は不可欠である。同じほどに両親が情的にも知的にも結ばれていることは不可欠である。ヘッセは、自分の母親が家庭の中でどのように存在していたかいつも感じていたことだろう。彼女は家庭の中で主婦として納まっていただけでなく、大変な知

性の持ち主であり、父と同様に知的雰囲気醸し出す人間だった。そのように母や家庭を無意識に感じていたものと思われる。妻となる女性は、ヘッセにとってそのような家庭の中心にいないからではないのである。マリーアとの結婚を決意した時、彼には妙なわだかまりがあったが、それにはヘッセの側から言えば、まずエリーザベトへの思いが払拭できなかったこと、つまり理性的には諦めているが感情的にはエリーザベトへの思慕の念が残っていたこと、マリーアが世間的にみて「しっかり者」ではあるが9歳も年上であったこと、知的世界の支え手となりうるようには見えなかったことが考えられる。残された写真のうちマリーアを知的な女性と見ることの出来るものは1枚もない。年を取っているためであろうが、しっかりした、特に家政をきちんと切り盛りしているマリーアには、いままじしの知的雰囲気と文学世界に没頭する自分に対し少しでも理解を示すようなところがあればと思ったことだろう。ところがそれをマリーアに要求することが出来なかったゆえに、ヘッセは一層文学世界に耽ることとなるのだろう。そして家庭生活に対し漠然とした不満の念がたまっていたものと考えられる。そのためであろうか、この時代の作品の傾向は回想的なものが多い。回想的にならざるをえなかったのだろう。小説集『此の岸』、『隣人』、『まわり道』にはそのような特徴が大変顕著に表れている。彼の視線はまず郷里のカルプやマウルブロンあるいはシュヴァーベンやイタリアや中世のヨーロッパに向いていた。『真夜中過ぎの一時間』などと比較すると著者の姿勢は確かに冷静で客観的にはなっている。情緒的になる傾向に歯止めがかかっているのは、著者の沈着な態度が出てきているためである。それが次第に自分の生きる現実を客観視するようになっていく。しかし三男マルティン誕生の頃、彼の中に鬱積した気持ちが突然吐き出されるようになってくるのである。ヘッセは逃れるように東方への旅に出る。先ほども書いたように、それまでの彼は家庭生活の不満をあまりあからさまに言っていない。ところがその旅行を機に言葉の端々に不機嫌な感情を度々表している。自分の家を荒野の牢獄とでも感じているのだろうか。旅行直前フリッツ・ブルンに宛てた手紙には次のような記述がある。「新たに所帯を持たれた事にお祝い申し上げます。家具を整え二、三の部屋を個人的な雰囲気であつた

したり、所有と支配の素晴らしい幻想に耽ったりすることはいつでも楽しいものです。ところが実際はその反対で全てのものに所有され支配されるのです。」²⁸これが所帯を持った人に対するお祝いだろうか。彼は自分の家庭生活を期待はずれの言葉で思わず告白してしまったのではないだろうか。そして三男のマルティンが生まれたばかりだというのに旅行に出発しようとする。「どうしてまたこのような旅行をしようとしているのか不思議です」²⁹と、カルプの家の人たちにまるで溜め息のように思わず打ち明けている。船上からの便りでは「陸上で受けた傷を癒したりしています。」³⁰ガイエンホーフエンで傷を受けたというのだろう。「赤道の太陽の照りつけるところからボーテン湖畔の霧のなかへ帰ることは喜びではありませんでした。」³¹旅から帰路につき、我が家が近づくにつれて不機嫌になっていくのである。「私は素晴らしい太陽の輝くところから厳しい荒野に戻るという許すことの出来ない愚行を、鼻かぜと喉の痛みによって償いをしています。」³²自分の家を荒野と言っているのである。12月半ばヘッセはガイエンホーフエンに戻ったが、もちろんヘッセとマリーアの関係はうまく噛み合わなかった。1912年5月26日フリッツ・ブルンに宛てて書いた手紙によると、自分の人生で一番素晴らしかったのは、11歳の時で、その後21歳から25歳までは不安定な時期だった。それから薬漬けの日々だったと言っている³³。26歳はマリーアと家庭を持つと考えていた年である。それから今までは苦痛の連続であったと感じているのである。このような疎外感の出てくる源は、ヘッセとマリーアとの間の何らかの軋轢しか考えられないのである。1912年9月5日、マリーアの希望でもあり長男ブルーノの学校入学のこともあり、ベルンの郊外へ移る。問題ををはらんだガイエンホーフエン時代は終わる。しかしその後のベルン時代もガイエンホーフエン時代と何ら変わるところのない時代である。その新たな住居は、画家で友人のアルベルト・ヴェルティ夫妻のものだった。どのヘッセ伝もふたりの関係をその新しい住居に関わらせて述べている。その家は死のにおいがするというのである。アルベルト・ヴェルティ夫妻は相次いで亡くなったが、その家にヘッセ一家が引っ越したのである。しかしその家の雰囲気によって彼らの中に暗い影や疎外感が生じたという考え方は妥当ではないだろう。夫婦がう

まくいかない主たる原因は、ふたりの間の軋轢である。家の雰囲気から来るのではない。ヘッセとマリーアは一緒になったけれども、極めて不釣り合いなカップルであった。互いに持っている内的世界があまりにも違いすぎていた。端的に言えば知的に違いすぎていたのである。

7

ヘッセはエリーザベト・ラ・ロッシュに心から思いを寄せた。エリーザベトの「ガルドーネに夢中になり、バーゼルの知人にはあまり興味がなかった」という回想から分かるように、ふたりは一緒になるめぐりあわせではなかった。ヘッセの心の無意識な領域にはエリーザベトへの思慕が残っていた。しかし家庭を持つことに憧れを抱いていた。少年時代からの長い孤独な状態から脱したい感情が非常に強く働いていたのだろう。家庭的で静かな「しっかり者」マリーア・ベルヌリは、失恋のため打ちひしがれていた孤独なヘッセを癒していくかに思われた。しかしヘッセのエリーザベトへの思慕や、文学活動に専念している態度や、マリーアの家政にしか専念しない態度や、あまり知的でない様子から、ふたりはうまく噛み合わず疎外感が生じたにちがいないのである。その疎外感はまるで重しのようにふたりの上にのしかかったのだろう。ところがふたりは非常に辛抱強い心の持ち主だった。ヘッセは少年時代の屈辱から立ち直り忍耐のいる仕事を通して、またマリーアは36年の歳月を通して辛抱強くなっており、はた目には落ち着きのあるカップルを形成していたのである。ふたりの生きる領域は、文学活動と家庭生活の領域だった。その間を取り持つ理解が欠けていた。それは彼の存在をも揺るがす状況になっていたのである。

注

- 1 高橋健二『ヘッセ研究』（ヘッセ全集別巻）新潮社 昭和32 99ページ。
- 2 Mileck, Joseph : *Hermann Hesse, Dichter, Sucher, Bekenner*, München 1979, S. 42. (オリジナルタイトル : *Hermann Hesse. Life and Art*. Los Angeles/London, University of California Press, 1978)
- 3 Michels, Volker (Hrsg.) : *Hermann Hesse, sein Leben in Bildern und*

- Texten*, Frankfurt a. M. 1979.
- 4 Hesse, Hermann : *Gesammelte Werke in 12 Bänden*, Frankfurt a. M. 1987.
Bd. 6, S. 110-129. (ヘルマン・ヘッセ『ヘッセからの手紙』ヘルマン・ヘッセ研究会編訳 毎日新聞社 1996年14-17ページ) (以下, GWと略記する)
 - 5 Hesse, Hermann : *Gesammelte Briefe*, Hrsg. v. Ursula und Volker Michels, Bd. 1 : 1895-1921 (in Zusammenarbeit mit Heiner Hesse). Frankfurt a. M. 1973, S. 60ff. (以下, GBと略記する)
 - 6 Kleine, Gisela : *Ninon und Hermann Hesse, Leben als Dialog*, Sigmaringen 1982, S. 14.
 - 7 Hesse, Ninon (Hrsg.), fortgesetzt und erweitert von Gerhard Kirchhoff : *Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert, Hermann Hesse in Briefen und Lebenszeugnissen, zweiter Band, 1895-1900*. Frankfurt a. M. 1978. S. 443.
 - 8 Ibid., S. 618f.
 - 9 GW : Bd. 1, S. 318, 323, 331, 335, 337.
 - 10 Ibid., S. 463f.
 - 11 GB : Bd. 1, S. 100.
 - 12 Ibid., S. 105.
 - 13 Ibid., S. 106.
 - 14 Ibid., S. 111.
 - 15 Ibid., S. 88f.
 - 16 GW: Bd. 1, S. 418.
 - 17 GW: Bd. 5, S. 5-163.
 - 18 GB: Bd. 1, S. 89.
 - 19 Ibid., S. 94f.
 - 20 Ibid., S. 99.
 - 21 Ibid., S. 123.
 - 22 GW : Bd. 10, S. 140f.
 - 23 GB : Bd. 1, S. 128.
 - 24 Ibid., S. 130, 135f., 140, 144, 161, 163, 179.
 - 25 Mileck, Joseph : a. a. O., S. 61ff.
 - 26 Michels, Volker (Hrsg.) : a. a. O.
 - 27 GW : Bd. 2, S. 5-178.
 - 28 GB : Bd. 1, S. 194.

- 29 Ibid., S. 200.
- 30 Ibid., S. 201.
- 31 Ibid., S. 203.
- 32 Ibid., S. 203.
- 33 Ibid., S. 206.

Hermann Hesse in Gaienhofen —zwischen der dichterischen Tätigkeit und dem Familienleben—

Naoyuki SUZUKI

Hermann Hesse liebte in seinen Tübinger Jugendjahren ein Mädchen namens Julie Hermann. Die Liebe war eine für Hesse charakteristische, ziemlich rechthaberische Liebe. Zuerst schrieb er einen Liebesbrief und sandte ihn der Geliebten nach seinem Abschied von Tübingen. Aus dem Brief kann man schließen, daß er wohl schon beim Einwerfen des Briefs diese Liebe überwunden hatte.

In seiner Basler Zeit verliebte sich Hesse in zwei Frauen, nämlich nur in eine : Elisabeth La Roche. Als ein Familienkonzert im Haus eines Bekannten in Basel stattfand, sah Hesse sie bewußt. Von Anfang an war er von ihrer Schönheit bezaubert, und er vernarrte sich in Elisabeth. Doch das Gefühl trat kaum zutage. Es blieb tief, sagen wir, unbewußt. Vielleicht konnte Hesse Elisabeth das Gefühl aus irgendeinem Grund nicht offenbaren. Er mußte dann auf sie verzichten. Die andere Frau war Maria Bernoulli. Sie wurde die erste Frau von Hesse. Er wollte sie heiraten und eine Familie gründen, doch er verzehrte sich offensichtlich nicht nach ihr. Er heiratete dann Maria,

dennoch blieb im Inneren etwas Unbestimmbares, was er sich auch selber nicht erklären konnte. Was es war, kann man aus seinen Briefen und Werken folgern. Ehe Hesse Elisabeth und Maria kennenlernte, hatte er schon als Junge immer ein tiefes Einsamkeitsgefühl gehegt, das niemals geheilt worden war, und er mußte seine Jugendzeit ohne Freunde erleben. Als er in Basel Arbeit fand, suchte er vor allem Bekannte seiner Eltern auf. Sein Einsamkeitsgefühl schien geheilt zu sein. Da er im Heranreifen ungeschickt im Umgang mit Menschen war, mißglückte ihm ein Umgang mit Frauen. Die Frau war ihm nicht Gegenstand des Umgangs, sondern der Anbetung. Eine Frau, die seinen Schönheitssinn traf, brachte er nur schwer in Zusammenhang mit der Vorstellung, sie zu heiraten. Elisabeth La Roche wurde und blieb seine Angebetete, die er dann eben nicht heiratete.

Die Frau, die er wirklich heiratete, war Maria Bernoulli, die häuslich und um 9 Jahre älter war als er. Was löste in ihm die Entscheidung aus, sie zu heiraten? Er stellte sich, meiner Meinung nach, vermutlich vor, durch die Heirat mit ihr ein ruhiges Leben führen zu können. Er glaubte sicherlich, daß die einzige Möglichkeit, aus dem Einsamkeitsgefühl herauszukommen, darin bestünde, sie zu heiraten und eine Familie zu gründen. Nachdem er Unglück in der Liebe gehabt hatte, paßte gewiß nur eine häusliche Frau zu ihm. Sie heirateten sich, aber der Traum ging nicht in Erfüllung. Warum? Hesse und Maria müssen beide in der stillen Atmosphäre ein ruhiges Leben geführt haben. Er muß sich einem literarischen Leben gewidmet und sie sich einem ruhigen, von Natur umschlossenen Leben ergeben haben. Er war in der Tat zwar in seinem literarischen Leben sehr tätig, und sie schien den Haushalt gut geführt zu haben, aber ihre Lebensweisen waren doch gänzlich verschieden. Überdies scheint mir, daß zwischen den beiden nicht so viele Gespräche stattgefunden haben mögen. Im Inneren von Hesse war wahrscheinlich immer noch die Sehnsucht nach Elisabeth. Im Werk wird erzählt, daß der Held

immer noch und immer wieder von Sehnsucht nach der Geliebten durchdrungen sei. Diese Sehnsucht nach Elisabeth mag Maria, die seine Frau wurde, bald gespürt haben. Sie muß im Inneren unruhig gewesen sein. Für Hesse bedeutete es keine Lüge, Maria zu heiraten und mit ihr einen Familienstand zu gründen. Ich glaube, daß Maria nicht so intellektuell war, und daß Hesse darüber etwas mißvergnügt war. Während er seine geschlossene Welt hatte——die dichterische Tätigkeit, in die er sich dem unglücklichen Familienleben entziehen konnte——lebte sie nun in dem alltäglichen Leben. Zuerst quälte sie der Zweifel an seiner Liebe zu ihr. Gleich nach dem Umzug wurde sie krank und kam nach Basel zurück. In Briefen dieser Zeit finden sich fast nur Nachrichten von dichterischen Tätigkeiten. Darin sind Zeilen über ihre Krankheit nun selten zu finden, aber auffallend. Von Anfang an klang ein starker Mißklang unter ihnen an. In Gaienhofen lebten die beiden unter dieser Disharmonie, die Welt des Partners nicht verstehen zu können. In ihnen schwanken zwei widersprechende Gemütsstimmungen. Die eine war, sich in die eigene Welt zu vertiefen ; die andere, sich die Welt, in die sich der andere vertiefte, gegen das eigene Verständnis zu wünschen. Aber zwischen Hesse und Maria lag fast kein Verständnis.